

第 62 回公開シンポジウム

子どもが命の尊さを学ぶとき

◆ プレゼンター

城 田 安 幸

弘前大学農学生命科学部准教授 / 進化生物学・行動生態学

◆ パネリスト

白 川 蓉 子

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授 / 幼児教育学

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色：それでは、第62回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもが命の尊さを学ぶとき」というテーマでお二人の先生からいろいろなお話をしていただこうと思います。最近では、命に対する尊さ、大切さが、特にいろいろな事件が起こる度に、人の命の大切さがどうなっているのか、子どもたちがそういうことを理解しているのだろうか、いつ頃からそのようなことを身につけていくのだろうかということが、社会的に見ても、非常に重要なテーマになってきています。今日は、その問題に真っ向から踏み込んでみようとお二人の先生に来ていただいています。実際に城田先生は、昆虫が大好きで、昆虫たちや小さな生き物たちとの触れ合いの中から、ご自身も命の大切さを学んだとおっしゃる生物学者でいらっしゃいます。ご専門は、進化生物学、行動生態学です。それと就学前の幼児の教育ということで、子どもたちに命の大切さをどのように伝えていけるのかを白川先生から伺って、「子どもが命の尊さを学ぶとき」というタイトルで講演会をいたします。最初に、基調講演は城田先生をお願いいたしますが、城田先生の簡単な略歴をご紹介します。現在は、青森の弘前大学の農学生命科学部で教壇に立たれる一方、いろいろな方面でご活躍されています。元々は大阪府立大学大学院で農学博士をお取りになって、オランダ・アメリカ・中国などで共同研究をされて、NHKの幼児番組「むしむしQ」、「あにまるQ」、「むしまるQ」の監修・構成などもされていらっしゃいます。城田先生自身「ドリームフォレスト」というところで、植物と昆虫の種類がたくさんいる環境を護ったりされています。では、城田先生お願いいたします。

城田：今、一色先生からご紹介いただいた、城田です。「むしむしQ」や「あにまるQ」などの「なんでもQ」は、みなさんが小学校の頃に放送されていましたが、ご覧になっていただいた方はおられますか？そのころ、幼稚園や保育園の若い女性の先生たちの間に、「虫だと聞いただけで毛嫌いする」、「昆虫の写真を見るのも嫌」という人々が増えているとのことでした。昆虫や生き物たちの「すばらしさ」や「たのしさ」を、伝えることができる番組がつかれないものかという思いをもった人々が集まって、作った番組が「なんでもQ」です。司会役のウララさんが、「ウララで一す」、「ぱきっちょぱきばき」、「カブトムシの角いつ生える」という具合に、クイズ形式で昆虫や生き物の面白さを、実写映像を

交えて伝えました。幸い、番組は好評で、「あにまるQ」は日本賞の放送文化基金賞を受賞しました。

この番組の中では、昆虫たちや生き物たちの、「うんち」や「おしっこ」など、日頃、あまりお茶の間では見られないような映像も、積極的にお見せしました。たとえば、フンコロガシは脊椎動物の糞に卵を産み、幼虫はそれを餌として育ちます。普通感覚では、少々「きたない」ものと避けるものを、積極的に「ふんころがしの歌」まで作って放送しました。「ふん ふん ふん ふん 汚い仕事と呼ばないで、おいらがやらなきゃ誰がやる～」という歌詞です。『愛のうんち』という歌は、「カバのお母さんがうんちする。子どもたちがそれをなめる。お～ お～、愛のうんち」というものです。

さらに、「かまきりの母ちゃんは、父ちゃんを食べる。だけどそうやって・・・」。カマキリの幼虫がアリさんたちに食べられてしまうシーンや、タガメが小魚を捕まえ、体液を吸うシーンも出てきます。そのシーンのタガメの台詞は、「ひどいやつだと思いでしょが、私たちも生きていくため、こうせざるを得ないのです」というものでした。つまり、できるだけありのままの昆虫や生き物たちの姿を、子どもたちに伝えようとしたのです。「きたない」、「嫌らしい」と思っているのは人間で、虫たちや生き物たちから見たら、それらはちっとも「きたなく」なく、「嫌らしく」もないということを伝えたかったのです。他の生き物を、餌として必要な分だけ食べる生き物の姿には、人間の価値観に基づく、「善」も「悪」ないことを、伝えたかったのです。

反対に、「ゴキブリだ！ 不潔！ 殺せ！」と、殺虫剤をところかまわず噴霧する人間や、「アリだ！ 殺せ！」と熱湯を巣にかける人間の営みは、昆虫たちから見ればどのように評価されるのでしょうか。その行ないの中に、「小さな命を大切にできない」人間の「問題」を、掘り下げて考えて見ませんかというのが、僕が、今日の講演でお伝えしたいことです。さて、子どもは、どのような経験を通じて「命の尊さ」を学ぶのか、一緒に考えて見たいと思います。

大漁 (金子みすゞ)

朝やけ小やけだ
大漁だ
大ばいわしの
大漁だ。
はまは祭りの
ようだけど
海の中では
何万の
いわしのとむらい
するだろう。

この詩は、27歳で自ら命を絶った詩人、金子みすゞさんのものです。彼女のような繊細な心をもった人は、人間の営みを、「大量虐殺」される「いわし」の立場から、直感的に捉えることができたようです。詩人の感性はするどく、「人間からみればいわしがたくさん取れて大漁だけれども、いわしから見れば何万匹もの死を悲しんでいるだろう」という、立場の違いを直感的に見抜いてしまいました。

今日のお昼に魚や肉を食べた人は、おられますか？ 私たち人間は、自らの命を継続するため、他の動物や植物の命を断ち、食物にしています。この行いに「罪の意識」を感じる人は、あまりいませんね。もっとも、ベジタリアンとして、動物の命はできるだけ食料にしない人々もいます。ベジタリアンの場合もお米やパンなどの小麦を食べています。これらは、その植物にとっての次の世代を作る種（たね）です。りんごを食べる場合のように、果肉の部分を食べ、種を残すことも可能ですが…。いずれにしても、僕たち人間は、他の生命を食べることで、自らの命を維持していかなければならないのです。このことと、「命の尊さ」を学ぶことは、矛盾するのでしょうか？ この点も、掘り下げて考えてみたいと思います。

それと、今ひとつ、生物学的には人間は必ず「死」を迎えます。ところが、文学作家の作品や、画家の絵画が後世まで残ることで、まるで、その作家や画家がいつまでも僕たちの中で生き続けているかのように見る、「永遠の命」とも呼べる、「命」の捉え方があります。自然科学的な、「生命」や「死」と、文学的、芸術的、宗教的な「生命」や「死」の概念は矛盾するのでしょうか？ それとも矛盾しないのでしょうか？ 子どもたちが捉える「死」の概念とはいったいどのようなもので、どのような経緯を経て学ばれるのでしょうか？ これらの問題も考えてみたいと思います。

ところで、昨日、大阪大学医学部に行ってきました。ガンをワクチンで治そうと、毎日研究を続けておられる杉山浩夫先生にお会いしてきました。杉山先生は、「免疫力を高めることで、ガンも治すことが可能な時代が必ずくる」という確信をもって、研究に励まれています。杉山先生は、研究を進めながら患者さんも診察されるお医者さんで、とてもお忙しいのですが、先生ご自身が運転される車で、わざわざ僕を送り迎えていただきました。その、杉山先生の車の中に、小さなアリが住んでいるのです。僕が直接観察したのではないのですが、先生のお話から察するに、体長が2ミリか3ミリで、体色が黒で頭がお腹より大きく見えるとのことでしたので、恐らくトビイロシワアリだと思われました。関西地方ではもっとも普通に見られるアリです。杉山先生は、「ちょくちょく出てくるのです。可愛くて、殺すのがもったいないからそのままにしています。この前、キャラメルを1個落としたのです。それにたくさんのアリが集まってきて…」と、いかにも楽しそうに話されます。

僕の父親は沖縄の生まれで母親は長野の生まれです。僕は大阪で、昭和23年（1948年）、いわゆる団塊世代のど真ん中に生まれました。杉山先生と僕は同じ年齢で、私たちが育った頃を描いた映画が、最近上映された『三丁目の夕日』と、その続編です。この映画にでてくる主人公の少年たちこそ

が、まさしく僕や杉山先生と同じ時代を生きた子どもたちです。その頃の日本は、まだ未舗装の道路がたくさんあって、水洗便所もなく、台風が来て大水が出ると、それはもう大変でした。尾籠（びろう）な話しになり恐縮ですが、汲取式の便所から人糞が、「ぶかぶか」浮かびだしてくるのです。道もどろんこ状態で、その中を素足で歩いて学校まで行き来するのです。

僕の家の前も学校への通学路も、もちろん未舗装でした。晴れた日は、道のいたるところにクロヤマアリやトビイロシワアリなど、何種類ものアリたちがいて、ミミズや小型のカナヘビなどを餌として、巣穴に運んでいました。町のいたるところに、地面がむき出しの「空き地」があり、そこで、一日中、アリを見ていることが好きでした。もちろん、学校の校庭にも、たくさんの昆虫たちがいました。僕は、これらのアリたちと一日中でも遊んでいられる、かなり変わった子どもだったようです。

小学校に入学するころに、「ゴジラ」や第2作目の「ゴジラの逆襲」という映画を父親に連れられて、観に行きました。「ゴジラの逆襲」ではアンギラスという怪獣が登場し、大阪城を舞台にゴジラと闘います。ゴジラとアンギラスの闘いで大阪城や市街地は破壊されます。その映画を見た次の日、大阪城の近くを、今の環状線で通過すると市街地は平穏そのもので、大阪城も壊れていないのです！驚いて父親に尋ねると、「あれは映画で、すべて作り物だ」と教えられました。つまり、小学校低学年の僕は、映画で見る世界と現実の区別がつかなかったのだと、大人になってから理解しました。

同様に、封切館ではない映画館で、数本の映画を同時に見たときも、不思議なことに出会いました。最初の時代劇で、刀で切られて死んだはずの人が次の映画では、また元気に歩いているのです。これも不思議でしかたがなかったことの一つです。映画の中で作られた「現実」と、本当の現実を識別することができないのが、子どもの特徴だと、自分が「大人」になったころ思いました。

昭和の30年代（1956、7年）から、僕の住んでいた大阪の町中でも、道路の舗装が始まりました。工業化も始まりました。学校の先生も多くの大人たちも、「工業化で日本も栄え、僕たちの生活も便利になる」と、口を揃えて言いました。道路を舗装することで、自動車も走りやすくなりました。でも、僕には、「舗装されるアスファルトやコンクリートの下に住んでいる、アリやトビムシたちがどうなるのか、とても心配でした。「いわしが大漁だ」と喜ぶ人々と反対に、「海の中では何万のいわしのとむらいするだろう」と考えていた、金子みすゞさんと同じ見方をしていたのです。そういう意味でも、「かなり変わった子ども」だったような、気がします。その原点とも呼べるものは、それまでの昆虫たちもふくめた、小さな動植物や、鎮守の森などにある大きな樹木とのふれあいから生まれた、生き物に対する「感性」だと思います。

僕が5歳まで過ごした町は、ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士が幼少期を過ごされた、現在の大阪府東大阪市高井田です。江崎博士が日本経済新聞の「私の履歴書」に記述されて

いたように、高井田村の景色には「畑と田んぼしかなかった」のです。小学校に入る前に高井田村から、現在、司馬遼太郎記念館のある東大阪市布施に転居しました。父親の大八車に乗せられて引っ越しをする道すがらの景色も、一面の畑と田んぼと菜の花とタンポポでした。季節はおそらく春だったのでしょう。ミツバチが忙しく動き回っていた記憶が鮮明に残っています。昭和の20年代の終わりの頃でした。

今では、想像さえできないことですが、近鉄の奈良線と大阪線の分岐点にある布施の駅前でも、オニヤンマが群飛していました(図1)。子供たちは糸の両端に石やナットを結びつけ、「ラッポエー」と叫びながら空中高くほり上げます。それを「餌」の小昆虫と見間違えたオニヤンマが、「エサだ!」と襲いかかり、糸にからんで落ちて来る。ラッポとりの「名人」は捕まえたオニヤンマを指の間に5、6匹もはさんでいました。子供たちの服はつぎはぎだらけのボロボロで、青く太い鼻水を拭くため、袖口が鼻水ででかっていました。先にお話したように、駅前さえ、まだ、未舗装で雨が降ると泥水が溢れ出していました。古材にトタン板を張り付けただけの、いわゆるバラック小屋が軒を連ねていました。



図1 昭和33年の頃の城田と母
(後ろは近鉄奈良線の電線)

実家の隣りの400坪ほどの空き地を借り、父と母がそこを耕し、畑作業をしていました。ジャガイモやサツマイモ、エンドウ豆やササゲ。キュウリにスイカにトマト。すべての野菜を、農薬を使わず栽培していました。ジャガイモには必ずオオニジュウヤホシテントウの幼虫がつき、葉っぱをほとんど食べてしまう。それでも、沖縄生まれの父親は、「虫はご先祖様だ」からと、殺すことを許してくれませんでした。特に、お盆のころは、「僕につながる祖先たちが、虫に姿を変えて会いに来ているのだ」と教えられました。

近所のどこの家の中にも、必ず、大きなアシダカグモがいました。「虫」が嫌いなお婆さんは、金網でできた「ハエタタキ」で、アシダカグモを叩きつぶすのです。腹部からでてきたクモの内臓を見た時、僕は、そのお婆さんを「許せない」と思う、変わった子供になっていました。だからでしょうか、今でも、生きた昆虫を採集して標本にすることに、罪悪感を覚えます。子供のころの僕の標本箱に入っていたものは、すでに死んだ虫を集めたものばかりでした。つまり、あまり、美しい標本たちではなかったのです。この点でも、きれいな標本を集めたがる、いわゆる「昆虫少年」とも違う、少し変わった子どもだったようです。

確か、小学校2、3年生の頃だと思いますが、カイコの胸にある三日月の模様を、「2つ一緒に見た

ら目に見える」と先生に話したことを覚えています。私には目玉模様に見えたものも、先生は、「みんなが三日月模様って呼ぶから、三日月模様って覚えましょう」と話されました。実は、大学の教員の職を得てから、30年間、ずっと続けている選択実験があります。それは、目玉模様に見える幼虫を次々選択し、より、目玉模様に見える模様をもったカイコを「進化」させる実験です。その結果得られたものが、ここに示す目玉クワイコたちです(図2)。



図2 目玉カイコとクワコを交配して創った目玉クワイコ

数年前、私が卒業した中学校の50周年記念の、記念講演をしました。その時に、小学校時代のその先生も来られていたのですが、先生は「そんなことあった? 覚えていない」とのことでした。先生にこの目玉クワイコの写真を見せると、先生は、「これは目に見えるね!」とおっしゃっていただきました。僕はとてもうれしかったのです! 子どもの時の「疑問」を、やっと先生に「認めて」いただいたという喜びでした。

僕の研究のテーマは、「進化を実験的に確かめる」方法を考えることです。今から約一億年前に生息していたと思われる化石昆虫にも、目玉模様があります。昆虫をはじめとして、魚や鳥やほ乳類まで、自然界にはこのような目玉模様を持った生き物たちがたくさんいます。もし神様がお創りになられたのではないとしたら、このような目玉模様はどのようにして進化して来たのか、それを明らかにすることが、僕のライフワークです。

自分の研究を方向付けるために、31歳の時に、「君は進化を見るかー虫たちの語るもの」という、児童向けの本を出版しました。幸いなことに「サンケイ児童出版文化賞」を受賞し、多くの方に読んでいただくことができました。この本のあとがきで、「わたしを『どうして病』に感染させ、現在まで研究を続けさせてきた原動力は、子どものころの自然とのふれあいの中から生まれた、知的探究心や好奇心だと思っています」と述べました。その自然が、どんどんなくなっていくのが、昭和の30年以降なのです。僕は知らず知らずのうちに「命の尊さ」を学んでいたようです。それは、まわりに自然がたくさんあり、命に満ちあふれていたからだだと思います(図3)。



図3 昭和28年 5歳の城田と6歳年上の兄

次に、子どもの時から、話を少し進めて、僕がみなさんと同じ年頃、20歳の頃のお話をいたします。実は来年の1月で61歳になります。僕が大学に入学した頃は、ベトナムの戦争がとても激しくなった時期です。1968年3月16日にはソンミ村虐殺事件が起きます。当初は、村民に対する虐殺ではなく「南ベトナム民族解放戦線のゲリラ部隊との戦い」という報告が行なわれましたが、翌年12月にアメリカの雑誌「ニューヨーカー」のセイモア・ハーシュ記者が「アメリカ陸軍が無抵抗の村民504人を虐殺」とこの事件を報じ、アメリカ軍の歴史に残る大虐殺事件が明らかになったのです。

戦後の「民主主義教育」を受けてきた僕にとっては、アメリカは常に正しく、自由で豊かな国で、あこがれの的でした。さらに、父方のおじいさんの世代にあたる方々がハワイに移住し、「パイナップルキング」と呼ばれるまで成功している親戚がアメリカにいることも、父親から聞かされていました。その、あこがれの国アメリカが、虐殺事件を起こしたという報道に接しても、僕にはにわかには信じる事が出来ませんでした。この後、日本をはじめ、アメリカやヨーロッパなど、世界中で学生運動が盛んになるのですが、僕は政治的なものに感心を示すよりは、山岳部に入部し、自然を楽しんでいました。当時は、政治的なものは「うさんくさく」感じていたのです。

実は、甲南女子大学のある兵庫県のこのあたりは、私にとって極めて思い出深いところです。毎週土曜日にすぐその六甲山にロックガーデンがあるのですが、そこでロッククライミングの練習をしていました。その時、一緒に山岳部に入部したのは2人、その後1名が加わり、同学年の部員は3名だけなのですが、4年生の時の冬山合宿で、僕と一緒に入部した伊藤君が亡くなりました。僕はある事情で、その冬合宿には参加していませんでしたので、余計に伊藤君の「死」に対して、責任を感じるようになっていました。「もし、僕が伊藤君のそばにいたら…」という思いは、今でもあります。

最初の春合宿の時に、疲れて動けなくなった伊藤君の荷物を担ぎ、山の稜線で昇ってくる朝日をみんなで見ただけの感激は、今でも思い出せます（図4）。その時の山岳部の部長先生が、名著『栽培植物と農耕の起源』で著名な中尾佐助先生です。中尾先生は自然科学者の枠に留まらず、民族植物学や民俗学にも憧憬の深い方でした。伊藤君が亡くなった直後の中尾先生の授業で、先生が話されたことが、「生物学的な死と、宗教的、文学的な死」でした。「すべての生物は死を迎えるが、宗教的な意味や文学的な意味では、いつまでも生き続ける生がある」という趣旨のお話だったと思います。当時、悲しみに打ちひしがれ、自分を責め続けていた僕は、中尾先生のお話を受け入れることが出来ませんでした。「生物学的に生きていなければ、すべての可能性がなくなる」と思っていたのです。



図4 20歳の城田 鹿島槍ヶ岳の春合宿にて

「若さはバカさだ爆発だ!」というコピーは、僕が考えたものです。一心不乱に、何かを求め続けられる、若いということは良いことです。でも、いつも、物事をある一面からしか見るができなかった自分に気付いたのは、年を重ねてからなのです。そういう意味では、年を重ねることも、なかなか素晴らしいものです。若さが邪魔をして見えなかったものが、いくつも見えてきます。

実は、中尾先生から「宿題」をいただきました。もし、僕が「大学に勤めることができれば、定年まで一つの選択実験を続けなさい」というものです。それで、目玉模様をもったカイコと野生のクワコをかけあわせて、成虫が空を飛ぶことが出来る目玉クワイコを「進化」させているのです。さらに、「君は小さなことに、こせこせしないで、一生をかけて一冊の英語の本を書きなさい。チャールズ・ダーウィンを超えなさい」とも言われました。宿題の締め切りは2009年です。もし、チャールズ・ダーウィンさんが生きていたら、200歳になる年ですね。来年です!

この写真の人は、小説『河童』や『蜘蛛の糸』を書かれた芥川龍之介さんです。この人は『人間失格』や『走れメロス』を書かれた、太宰治さんです。太宰は1909年に生まれましたので、来年生きていたら100歳になります。僕の父も、来年、もし生きていたら100歳になります。でも、父は77歳で、僕の過ちで別の世界に旅立たせてしまいました。父のことについては、後ほどまた、お話いたします。

この写真の人は夏目漱石さんです。ところで、皆さんは学校などで、芥川とか太宰とか漱石の作品の一部を読んだり、習ったりしていますね。でも、漱石の家に芥川が尋ねていった話は、ご存知でしょうか?その時、芥川は、若干25歳です。漱石は49歳。49歳の漱石が実は芥川たちに会って、こんな手紙を出します。「君たちの手紙が、あまりに澁刺としていたので、不精の僕ももう一度君たちに向かって、何か言いたくなったのです。言わば、君たちの若々しい青春の気が、老人の僕を若返らせたのです」。49歳の人が、自分を老人だと呼ぶのです。となると、60歳の私はもっと老人ですね。

49歳のその年に、漱石は亡くなってしまうのです。漱石が、芥川たちに宛てた手紙の中身は、「牛になる事はどうしても必要です。(略) 焦ってはいけません。頭を悪くしてもいけません。根気づくでおいでなさい。世の中は根気の前に頭を下げることを知っていますが、花火の前には一瞬の記憶しか与えてくれません。うんうん死ぬまで押すのです。それだけです。(略) これから湯にはいります」というものです。あの、頭脳明晰な夏目漱石でさえ、何かをやりとおすためには、「牛になれ」というのです。僕にも、この十年間、「うんうん」牛になりながら考えている問題があります。それは、「生物はどうして死ぬように進化したのだろうか?」という問題です。ほとんどの生物の個体は、必ず死んでしまいます。ではなぜ、死なない生物が、もっとたくさん増えなかったのだろうか?それより、死なない生物っているのでしょうか?

このポスターの女性は、シャロン・ブリンさんです。日本のテレビ番組などでも紹介されていました

が、シャロンさんは21歳の時に、脳に大きな腫瘍があることが分かりました。腫瘍を手術で摘出して、後3年間、ケモセラピー、抗がん剤治療をしました。けれども今度は、卵巣にガンが転移し、卵巣の摘出手術もしました。今も抗がん剤治療をしながら、一生懸命ガンと「闘って」おられます。この写真のように、抗がん剤の副作用で毛が全部抜けてしまいました。なぜなら、抗がん剤はガン細胞のように、どんどん分裂を続ける細胞を攻撃するからです。実は毛根や免疫細胞も、分裂を続けています。そこで、抗がん剤治療を続けると毛が抜けたり、免疫細胞がダメになり感染症にかかりやすくなるのです。シャロン・ブリンさんは、「頭に毛が無くても、ガンと闘い続けている患者さんたちは美しい!」と言っています。私も同感です。ところで、なぜガン細胞はいつまでも増え続けるのでしょうか？

実は、私たちの体を構成する正常な細胞は、一定の回数、分裂を行なったのちは、「遺伝的に組み込まれた自殺（アポトーシス）」を行ないます。アポトーシスとは、私たちや昆虫たちのような多細胞生物の体を構成する細胞の死に方の一種で、個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされる、管理・調節された細胞の自殺、すなわち「プログラムされた細胞の死」と定義されます。一方、血行不良、外傷などによる細胞内外の環境の悪化によって起こる細胞死は、ネクローシス、または壊死と呼び、アポトーシスと区別します。ガン細胞は、アポトーシスを起こさなくなったため、いつまでも増え続けていくのです。つまり、「死なない細胞」、「死なない生命」はガン細胞で、私たちのすぐ身近にいたのです。

ガン細胞とは異なりますが、エイズウイルスもなかなか死にません。もっとも、「ウイルスは生物ではない」と考える方もたくさんいますが、僕は「生物のひとつのあり方」と考えています。限りなく無生物に近い生物もいれば、限りなく生物に近い無生物もあるのです。ウイルスは前者だと、僕は考えています。エイズウイルスが発見された時、科学者は、「2年以内にエイズを克服するワクチンを作る」と公言しました。でも、誰にもこれはできませんでした。エイズに対するワクチンは、できてはいないのです。なぜなら、非常に変異しやすいウイルスだからです。ウイルスの表面抗原がそれぞれ違うといえるほど、多種多様な型があります。その為、ワクチンを作成する事が極めて困難なのです。ある特定の抗原に対して抗体を作ることが出来てワクチンができたとしても、すぐに変異ウイルスが「進化」してくるため、効果がなくなるのです。

少し難しいお話になりますが、今から約10～20億年前、海の中で僕たちと同じような真核生物が進化する時、先ほどお話した「管理・調節された細胞の自殺」、すなわちアポトーシスが進化したようです。それと時を同じくして、「性」、セックスが進化するのです。真核生物は、「なぜ、たくさんのコストを払ってまで性を進化させたのか」については、いくつかの議論があります。亡くなられたイギリスの理論生物学者、ウィリアム・ハミルトン博士とオックスフォード大学で話し合い、『対談21世紀 人類の進化シリーズ』というテレビ番組をつくりました。ハミルトン先生が京都賞を受賞された次の年です。その時、ハミルトン先生は、「原核生物やウイルスなどの病気に打ち勝つために、真核生物は性を

進化させた」とのお考えをお持ちでした。つまり、どんどん突然変異を起こして「進化」する病気に対して、性により遺伝子を組み替える方法で、僕たちの祖先は対抗してきたと、考えられていたのです。

また、ハミルトン先生は、「一定の役割を果たし、遺伝子を次の世代に伝えた個体は、速やかに集団中から、積極的に消え去る、つまり死ぬべきだ」とも述べられたのです。さらに、「細胞の死がアポトーシスのようにプログラムされているのだから、個体の老化や死も、あらかじめプログラムされたもので、肯定的に受け入れるべきだ」とも述べられました。もし、先生のお考えが正しいとしますと、「死」は決して「悲しい」ものや「否定的」なものではなく、生物学的には、「肯定的」で積極的に受け入れるべきものになります。でも、その「死」は、個体としての一定の役割を果たした後の、老化に続く「死」であるべきだと、僕は考えます。

とても悲しいことがありました。長崎で、女子小学生が友だちの首をカッターナイフで切り、殺してしまった事件です。友人を殺害した女子小学生は、今でも、「自分が殺した相手に対して謝りたい」と言っているそうです。すでに、自分が殺して死亡した友人に、どうやって謝ろうと考えているのでしょうか。2004年の9月4日、5日に放映された番組、NHKスペシャル「子どもが見えない」で、長崎県長崎市立茂木小学校6年生担任の西田利紀教諭が、「死んだ人は生き返ると思いますか」という質問調査を行ないました。この問いかけに対し、6年生のあるクラス33人中28人が「死んでも生き返る」と思うと回答したということです。みなさんはどうでしょうか？死んでも生き返ると思われる方は、挙手していただけますか？だれも手を上げられないということは、みなさんは「死んだ人は生き返らない」と考えられるわけですね。この会場のみなさんと、長崎の小学6年生との違いを、どのように理解すれば良いのでしょうか？「子ども」と「大人」の違いだと、割り切れればよいのでしょうか？それとも、今を生きる子どもたちの間に、何か変化が生じているのでしょうか？

多くの子どもたちが、「死んだ人は生き返る」と答えた背景に、コンピュータゲームの影響を指摘される研究者もあります。たとえば、ゲームの場合は、「ゲームオーバー」で、またいつでも、一からやり直すことができます。さらに、ややこしくなってきたり、自分の気に入らなくなったら、「リセット」をかけることが可能です。このようなバーチャルな世界や「死」と、現実のものが混同されているのではないかという指摘です。ところで、『死の人間学』の中で、内田伸子先生が、興味深い事を述べられています。前述の西田教諭が小学生にしたのと同じ質問を大学生に問いかけたところ、回答を寄せた32名全員が、「人は一度死んだら生き返らない」と答えたとのことでした。ただし、その中に、次の回答を寄せた大学生もありました。

回答：幼児期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

学童期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

青年期の頃の自分：「人は一度死んだら生き返らない」と答えます。

成人の自分：答えは二通りあります。

1. 人間の肉体は心肺停止によって、壊滅し消失するので、生き返らないです。一略ー
2. 人の魂や精神は永遠に残ることがありうると思います。たとえば、偉業を成し遂げた人は後世の人々の中で不滅なものとして生きることがあります。また、自分の愛する人は亡くなっても、ずっと自分の心の中に生きることがあります。よって、「人の魂は一度死んでも生き返る可能性もある」と結論づけられます。

この大学生は、生物学的な「死」と、「人の魂や精神」とよぶ「命」は、「永遠に残ることがありうる」と考えているのです。この点は、ハワイに移民して、アメリカ人になった僕の親戚たちも、同様に考えています。ハワイのマウイ島には、城田家のお墓がありまして、2年に1回マウイ島に、世界の城田さんや親族が180人ぐらい集まります。その中には、クリスチャンの人が3分の1位いるのです。その人たちは、本当に死んでも生き返ると思っているのです。死んでしまっても、死後、裁きにあって、いいことをしている人は、天国で蘇ることができる。悪いことをしている人は地獄にいつてしまう。つまり、神や靈魂の存在を、本当に信じているのです。

養老猛司さんが『バカの壁』という本を出版されました。『バカの壁』は養老孟司さんが話されたことを、編集部の方が口述筆記された著作です。2003年4月10日、新潮社より刊行されましたが、400万部を超えるベストセラーとなり、同年の新語・流行語大賞、毎日出版文化賞特別賞を受賞されました。養老さんも昆虫少年で、ゾウムシを集められています。その養老さんが4歳の時に、お父さんが亡くなりました。そのお父さんとの別れを、次の著書『死の壁』で、養老さんは克明に記述されています。

「父が亡くなったのは夜中だったので私は寝ぼけていました。臨終の間際に親戚に「お父さんにさようならを言いなさい」と言われました。でも言えませんでした。その後、父は私に微笑んで、咯血して、そして亡くなりました」と。さらに、「私は父が死ぬ直前に、挨拶を促されたがしなかった。父はその直後に亡くなった。私は無意識に、自分はまだ別れの挨拶をしていない、だから父とはお別れをしていない、と思っていたのです。それはつまり、父の死を認めていないということです」と…。養老さんはお父さんの死をずっと引きずっておられたようです。「幼い頃の私は内気な子どもだったようです。近所の人に挨拶が出来なかった。挨拶が苦手な子どもでした」とも述べられています。

養老さんは、なぜ、自分が挨拶が出来ない子どもになってしまったのか、大人になってもわからなかったようです。でも、それは、自分のお父さんが亡くなったことを自分で認めたくなかった。なぜなら、挨拶をしてしまったら、そのお父さんが自分のところからいなくなってしまう。だから、自分は挨拶を拒んできた。「挨拶が苦手なことと、父の死の記憶は直結していた」。それがわかった時に、35歳

の養老さんは、地下鉄の中でおいおい泣いたと述べられています。養老さんの結論は、単純で明快です。「死は回復不能です。一度殺した蠅を生き返らせることは出来ません。だから人を殺してはいけなし、安易に自殺してはいけなし。安楽死をはじめ、死に関することを簡単に考えないほうがよい」。私も同感です。

養老さんのお父さまは、結核で亡くなりました。今では、結核はストレプトマイシンなどの抗生物質で治り、ガンと比較してもそれほどたいへんな病気ではなくなりました。でも戦前の日本では、多くの人が結核で亡くなられていたのです。今から65年前の、日本人の平均寿命をご存知でしょうか。先程の芥川龍之介が生まれた頃、つまり明治の中頃は36歳です。ところが、今から65年前、昭和20年の平均寿命は、なんと男性23歳、女性37歳。当時は「人生25年」と考えられていたそうです。江戸時代の平均寿命でも、60歳に達していたことと比較すると、とてもひどい時代であったことが分かります。理由は明らかです。戦争のために多くの若者が戦場で命を落とし、国内でも沢山の人が空襲で殺されたからです。また、食べ物も極度に不足していました。生命力の弱い乳幼児の死亡率も高かったからだと思います。戦争ほど、命の尊さを踏みにする人間の行為はありません。さらに、あまり考察されてはいないことですが、人間が引き起こした戦争で犠牲になっているのは、人間だけではなく、戦場となったそこに住んでいる、いろいろな昆虫や小さな生き物たちや、焼き尽くされる草花や樹木たちも、その生命を奪われているのです。

最後に、私の父のことについてお話いたします。若い頃の私は、父親が「嫌いで、嫌いで」仕方ありませんでした。理由は簡単でした。沖縄では、数え年で13歳（満12歳）になる時に「十三歳祝い」というお祝いをします。自宅の横の畑地で、僕たちは山羊を飼っていました。父親が僕のお祝いに「ヤギを食べる」と言うのです。私は「絶対に嫌だ!」と拒みました。なぜなら、ヤギは僕の家族だったからです（図5）。ビートたけしさんも同じ経験をしたと、『たけしくん、ハイ!』という著作の中で述べられています。ただし、ビートたけしさんたちが食べたのは、ヤギではなくニワトリでした。僕が学校から帰ってくると、山羊は「肉」になっていました。私はその時、父親を「殺したくなるほど」憎みました。でも父親はこう言いました。「お前がこの山羊を食べることで、山羊がお前の体の中の血となり肉となって、お前が死ぬまでずっと一緒に生きていってくれるのだ」と。少年の私には、父親のその考えが理解できませんでしたし、父親を許すことが出来ませんでした。



図5 沖縄伊江島でヤギと遊ぶ城田

その父は、私が39歳のときに亡くなりました。実は、父親はガンではなかったのに、医師が「胃ガン」だと誤診しました。医師から私は、父の胃の全

摘手術を勧められました。父が高齢のこともあり、家族は皆、「手術することを反対」しましたが、私が医師に説得され、家族を説得しました。手術をし、胃を全部摘出しましたが、その手術から3ヵ月後に父親は亡くなりました。医師は隠蔽しましたが、手術の途中で血圧が24まで下がっていたのです。当時、まだ、大阪市内の中之島にあった、大阪大学の医学部で父親を解剖してもらいました。さらに、生前の細胞も調べ直していただきました。結果は、父はガンではなかったのです。その父を、手術をさせることで、77歳で別の世界に、僕は旅立たせてしまったのです。この十字架を、僕は一生、背負い続けなければならないと思って生きています。

死に対する父の考えは、次のようなものです。「人は必ず死ぬ。死んだ人の魂はすべて天国に行く。しばらく天国でゆっくりした後、またこちらの世界に戻ってきて、いつもお前たちのそばで一緒に暮らしている」。この考えは、父が生まれて育った、沖縄のひとつの代表的な「死生観」です。ハワイで生まれて、現在、ロサンゼルスに住んでいる作家のジョン・シロタが著わした『レイラニのハイビスカス』でも、亡くなった父と母の墓前で、彼らの霊が見守る中で、主人公の「ヤスイチ」が、初恋の人と再会する場面を中心に、劇は進みます。真珠湾攻撃の最中にも、楽観的に生きた僕たちの家族を描いた、『ラッキーカム ハワイ』という小説でも、ジョン・シロタは、沖縄的なものの見方や考え方で、話を進めます。アメリカで生まれて育った彼が、「沖縄の死生観」を持ち続けているのです。

進化生物学や行動生態学を専門とする私が、「りんごの抗腫瘍効果」の研究を40代から始めた理由は、解剖された翌日の僕の夢の中に出てきた父親から、「手術と抗がん剤と放射線治療に代わる方法を考えなさい。それが、残されたお前の人生を賭けてやるべきことだ!」と、告げられたからです。「戻って来るにしても早すぎるな!親父(おやじ)」と、夢の中で話していました。

ガンの研究を進めている理由は、今ひとつあります。社会人入学され、学部を飛び級で大学院に進学された、小野さんとの出会いと、ガンによる別れがあったからです。私より2歳年下の小野さんは、たばこが大好きでした。苦学して、一生懸命努力して、「国際細胞士」の資格を取られた小野さんは、自分の胃が「ガンである」ことを医師から告げられます。胃を全摘手術した後、小野さんは第2の人生として、弘前大学への進学を決意されました。その小野さんの「指導教官」が、僕だったのです。ところが、本当は、僕が小野さんから、いろいろな細胞の染色の仕方や研究方法を習ったのです。僕にとっての40の手習いの、良い先生でした。僕のところで修士を取られた後、他の大学院の博士過程に進学され、学位も取得され、これからというところで、ガンが再発し、戻らぬ人となりました。その小野さんとの約束が、免疫力を高めることで、ガンを予防する方法を確立することなのです。眠る時間も惜しみ、休日も休まず、相変わらず忙しい生活を続けていますが、父親との約束や、小野さんとの約束を果たすためには、今しばらくは、がんばらなければならないようです。

最後に「マジック・アップル」という絵本の話をして、僕の基調講演を終わりたいと思います。イギリ

スの作家レイナー・サセックスさんの絵本を、妻の城田あい子と一緒に翻訳して出版しています。タレントの黒柳徹子さん、武田鉄也さん、川津祐介さん、三遊亭楽太郎さん、藤本義一さんらに呼びかけ人になっていただき、「印税の50%を寄付」する活動を続けています。まだまだ少ないのですが、45万5千円をユニセフや国際自然基金に寄付することができました。絵本の内容は、ポッターおばさんの庭にできた、「誰でも最初にガリッと、ひとかじりした人の願いごとが叶う」という、不思議なりんごのお話です。(図6)



図6 絵本『マジック・アップル まほうのりんご』

村の風車小屋が火事で焼けてしまったので、「新しい風車小屋が欲しい」という願いを、村のみんなを代表して村長さんがすることになりました。ところが、村長さんがマジック・アップルを「ガリッ」とかじると、りんごは「キュー」としぼんで、木も枯れてしまったのです!なぜなら、村長さんは、みんなの願い事をするふりをして、「自分の家の地下室が金貨でいっぱいになるように…」と、お願いしたのです。マジック・アップルは、自分だけを幸せにするような願い事や、他の人を不幸せにするような願いごとは、叶えてくれないのです。それどころか、そのような願い事をしますと、マジック・アップルの木は枯れてしまうのです。マジック・アップルが枯れてしまったので、ポッターおばさんは悲しみます。「もう、だめだ」と思いながらも、ポッターおばさんはマジック・アップルの種を蒔きました。次の日の朝、ポッターおばさんは驚きました!一晩のうちに木は大きく成長し、その木には大きなマジック・アップルが実っていたのです。この「お話」は、もちろん、「おとぎ話」で、自然科学的には、「あり得ない」ことだと思われます。でも、自然科学的なものの見方以外にも、文学的なものの見方や、芸術的なものの見方、宗教的なものの見方があり、それらが矛盾せず受け入れられることが、可能ではないかというお話をしてきました。

私は今日、皆さんの心の中に、もしかしたら、マジック・アップルの種を蒔いたかもしれません。それを育てるかどうかは、皆さん次第です。時間がまいりました。後の討論の中でまたお話させていただきます。どうも長い間ありがとうございました。

一色：城田先生、どうもありがとうございました。お話は非常に意味深いもので、私を感じましたのは、一人ひとりが、ここに参加している、生きている一人ひとりが、死ということを認識する、それが一番の原点ではないかという問いかけを寄せられたのかと思いました。そういうことからすると、今日のテーマである「子どもが命の尊さを学ぶとき」ということになると、小さい子どもたちは、一人ひとり、死をどうやって認識していったらいいのだろうかとなります。そこで次に、パネリストとして白川先生に

そのことについてお話していただきます。白川先生は、子どもの遊びと学びと発達や、フレーベルやモンテッソーリの幼児教育プログラムをご研究されていますので、そういう意味で幼児期に小さい子どもたちが第一歩として、人間として、死を認識していくというためには、どのような経験なり教育が必要なのかという点でコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

白川：城田先生のお話はとても意味深いものがありましたから、私は、お話ししようとしていた内容をちょっと変えてみます。私は幼児教育学が専門ですが、まず、私の死の体験からお話したいと思います。私は、子どもの頃、戦争の被害者でした。4歳の時に、満州の大連から引き揚げてきたのですが、何人もの子どもがそうであったようにひどい栄養失調でした。引き揚げてきた時に、長野にある父の田舎の広い部屋で、全く動けませんで、ずっと寝ていました。その前の大連にいたときに、おばさんが死産をして、赤ちゃんが亡くなった経験はありますが、それはあまり深い印象ではありませんでした。4歳になって、日本の田舎の広い家で、起き上がれず、ずっと寝たままでした。すると父親が戦争から帰ってきました。父親の知り合いの医者が、枕元にきて、「この子はもう長くありません。生き延びることはできないでしょう」というのを聞いていて、なんとという不条理なことかと思った記憶があります。なんで、この歳で死ななければいけないのか。死とはどういうものなのかと考えました。小学校に上がるころまで自分自身も活発に動けないし、遊べないし、とても悔しい思いをしました。今思うと、私は生きることに関心を持っていて、ハングリーなのです。その原点はこれかなということを時々思い起こします。

さて、幼児教育では、皆さんご存じのように、アニミズム的な生命観、つまり、生きているものと生きていないものをきちんと区別できない状態があります。学生さんはご存知かと思いますが、私の『育ちあう乳幼児教育保育』というテキストにも出てきます。アニミズム的な生命観というので、山も月も太陽も皆、自分と同じように生きていると思っている時期があります。幼児は作文を書きませんが、幼児の言葉を記録した口頭詩というのがあります。子どもが何気なく呟いた言葉を記録して、幼児のものの見方、考え方を探ろうとするものです。口頭詩中で気に入ったものを集めてテキストにも掲載しています。面白いのを紹介します。保育園の子どもが、夜、お母さんと一緒にお買い物するために歩いていた時に、月が自分の後をどんどんついてくるということを発見します。翌日保育士に「ぼくの後にお月さんがどこまでもついてきた」と話します。月が自分の後をついてくるというのがアニミズム的な世界観だと思うのですが、それに対して、保育士さんが何と言ったと思います？「○○ちゃんのところについてきたの？実は、私のところにも夜にお月さんがついてきたのよ」と言うのです。するとその子どもがびっくりして、「お月さんはバラバラになってしまうのかな？」と言うのです。もう一つ気に入った口頭詩があります。2歳6ヵ月の女の子が、お母さんと食事をしていて、お母さんが「お味噌汁の中のいりこを食べてごらん」と言います。すると子どもが「これおさかな？」と聞きます。そしてお母さんが「これを食べたら、身体の中の骨になるのよ」と言います。するとその女の子が「そしたら、なおちゃん、お魚になるの？」と言うのです。2歳6ヵ月から3歳ぐらいの子どもにとってはお月様も、虫も、お魚も、庭のお花も、絵本の中の架空の主人公も、すべて自分と同じ生き物なのです。私の幼児期の頃のこんな思い

出があります。父親がユーモアのある人で、私が3歳の頃でした。父親が、外地から帰ってきた時に、きょうだい皆を居間に集めたのです。お土産だと言ってオランダの大きな赤いセロファンに包まれたチーズの塊を居間のテーブルの上にどんと置きました。そして父親が「今から3つ数えたら、ここから赤鬼が生まれてくる」と言うのです。私は、赤鬼とか青鬼の怖さを知っていたようなので、初めて見たチーズの塊から本当に鬼が生まれてくると思って、すごい恐怖感をもって、きょうだい皆で2階に逃げた記憶があります。子どもは生きているもの、生きていないもの、それから実在するものと実在しないものなど、混沌として心の中に抱いています。

城田先生のお話から、幼児教育では生きもの、命のあるものがどういうものかということを生きものと関わりながら学んで行くのだと思いました。幼稚園や保育園では必ず小動物を飼ったり植物を育てたりしています。幼稚園を創設したフレーベルの思想を引き継いでいるのです。ここにいる大多数の人が、幼稚園、保育園の実習に行っています。ある実習生からこのような話を聞きました。ある保育園で、ザリガニを飼っていたのですが、それは教材としてどこかから買ってきたらしいのです。子どもたちがそれぞれザリガニを描いたりします。やがてザリガニが死んでしまうと、教材として役に立たなくなったザリガニを水道で洗って、生ゴミに出しているのです。そして子どももその周りで遊んでいたのを見て、実習生は、生きものと関わるということをどういうふうに教えていったらいいのかという問題を感じたようです。

さて、幼児教育現場で、死についてどのように扱ったらいいのかということで、まず、幼児教育から少し離れますが、「豚のPちゃんと32人の小学生」という映画やテレビドラマがとても話題になっているのを紹介します。小学4年生の夏に、担任の先生は皆で食べるために豚を飼うことを提案します。子どもたちは熱心に子豚の世話をし学級全体で飼育しているうちにPちゃんと名前をつけられた子豚は子どもたちのペットとなり、仲間となって行きます。やがて6年生の卒業を目前にした頃には、先生の「最後にはみんなで殺して食べる」というねらいは子どもたちにとって受け入れられないものとなって行きます。

「ぶたのPちゃん」のお話は、ある程度、「生」と「死」について認識できている小学生の話です。幼児の場合はすでにお話しましたように、生命というものについて混沌とした観念をもっています。今ここに示したのは、イギリスのスーザン・アイザックスという人の1930年代に書かれた本です。本は300ページにも及ぶ2冊の本です。アイザックスがイギリスのケンブリッジにモルティングハウスという幼児学校をまかされて、そこで実践をした生きものとの関わりの実践記録です。その実践記録のほんの一部を取り上げてみます。

1925年7月14日、この幼児学校で、うさぎが一羽、夜の内に死んだ。4歳1ヵ月のD男が見つけて言った。「死んでいる。お腹がもう上がったり下がったりしないもの」そうすると別の男の子P男、4歳3ヵ月が「水に入れたら生き返るってパパが言ったよ」と言います。I先生（スーザン・アイザックス）が「そうしてみましょうか」と提案し、風呂桶に水を入れて死骸を入れた。「生きているよ、だって動いているよ」と一人が言った。それは、水の流れによって起こった渦状の動きだった。そこで、I先生

は、木片を水に落とした。木片は同じようにぐるぐると回ったが、生きてはいないことを子どもたちは認めた。子どもたちは土を掘って死んだうさぎを埋めてお墓をつくった。その翌日に5歳8ヵ月のF男と7歳2ヵ月のDc男がうさぎを掘り出す相談をしていた。そしてそのF君が「もういないさ。天に昇っていったよ」。彼らは、掘り始めたが、やがてくたびれて他の遊びに行ってしまった。しばらくして戻ってきて、また掘り始めた。するとDc男が「もうやめよう。もういないよ。天に昇ったのだよ」と言ったので、I先生が「まだいるかどうか見てみましょう」と言って、一緒に掘った。子どもたちは、うさぎを見つけて大いに興味深けだった。

1日後ですから、死骸がまだ死骸の形で残っているわけです。それで子どもたちはとても興味深けだったのです。

1926年7月20日、今度は、子どもたちがそれぞれ1匹ずつネズミを解剖した。「痛くないよね」と確かめるように聞いた。・・・解剖しながら、5歳1ヵ月のD男と、6歳10ヵ月のP子が、死んだネズミを子どもにしたてて、お母さんとお医者さんを演じた。・・・D君が「では、この子に水をかけて生き返らせますから」と言って、P子が先生にネズミの死骸を渡して「ほら生き返ったわ」と言った。先生が「本当?」と聞くと、D男が、「そのつもりになっているだけだよ」と言う。P子は、ネズミの体内の大きな臓器をすべて見た。そして腸を引き出して腸の長さを調べた。そしてP子が「私たちにもこんなに長い腸があるの?」と聞いたので、I先生は「私たちの腸の長さは10ヤードかそれよりもっと長いよ」と話した。すると彼女は、「私たちもネズミと同じものを全部持っているの?」と聞いた。その後のP子の母親の報告では、帰宅途上でP子は、「ねえママ知っている? 私がママのお腹にいたとき、私のそばには、10ヤードぐらいの腸が折りたたまれて入っていたのよ」と言ったそう。 (白川蓉子編著 増補乳幼児の教育 明示図書 60ページより)

この実践では子どもたちの「生と死」についての知的好奇心を実際に確かめることによって解決させています。それだけではなく一緒に遊んだうさぎやネズミと永遠に別れることについて最後はお墓を作って命の大切さを感じとらせています。子どもたちは意外と冷静に動物の死を見ていて、死骸も興味深げに見ていたわけです。私のテキストにこれを載せていたのですが、学生の反応は、幼児教育実践ではそこまでやるべきではないという反応が大部分でした。

幼稚園ではつぎのような実践事例もあります。ある幼稚園で、子どもたちがカマキリの卵を見つけきて、カマキリを育てようとしします。卵からかえった幼虫をプラスチックのカゴに木の枝と水に浸した脱脂綿などを入れて大切に飼いはじめました。そして、子どもはカマキリというのは、生きたままのバッタを食べるということを調べてきます。すると今度は別の子どもが、幼稚園の行きかえりに空き地でたくさんバッタを捕まえてきました。子どもたちはこのバッタをカマキリのかごに入れるのです。すると本当に生きたままのバッタをカマキリが食べていきます。子どもの何人かは息を殺してカマキリがバッタを食べるところを見つめています。幼稚園の先生は見たくないという子どもを無理に見させることはしませんでした。見た子どもはそのときの緊張感をいつまでも忘れないことでしょう。いろいろな事例

を出しましたが、討論の材料にいただければと思ひましてお話ししました。

一色：白川先生ありがとうございました。白川先生から今、就学前の幼児たちに生きている命あるものとは一体どういう存在なのかということを教えるためにどんなことができるのか。そして特に幼稚園、保育園では例えば虫を飼ったり、植物を育てたり、そのようなことを通して、その大切さを伝えていくということをされている。それからアイザックスの実際の例なども出して、それからバッタを無残にも殺してというお話も出てきました。これは、城田先生も子どもたちは、アリの足を取ってしまったり、虫を殺してしまったりというのは、自然に行われているということをおっしゃっていましたが、そういう視点から、今の白川先生の発言に対してどうお考えでしょうか。

城田：一生懸命、白川先生のお話を理解しようと考えていたのですが、少し、分かりにくいところがあつて…。今、一色先生がまとめられたので、そのように考えればいいのかと思ったのですが…。実は、もう少しわかりやすく、私たちが子どもの頃にした、「ごっこ遊び」を例にお話ししたいと思ひます。

僕が子どものころ、赤トンボがたくさん出てくる頃に、女の子が赤トンボを胸のところから引きちぎり、胸部と腹部を分けるのです。私は、そのころ背が低く、「おちび」と呼ばれていました。「おちび、トンボを捕っておいで。捕ってこなかったら泣かすで」と言われて捕ってくると、女の子は目の前で胸と腹を分けるのです。腹部だけを並べるとトウガラシのように見えるのです。女の子は八百屋さんになり、「トウガラシ買いにおいで」というのです。僕にとっては、これは、かなり怖かった。トンボは翅のついた胸と頭の部分を、一生懸命バタバタやっています。「可哀そうだ」と言うと、その女の子は「大丈夫」と言って、稲わらを短くちぎって胸部につけるのです。すると、トンボはバランスが取れて飛んで行ってしまうのです。それで「ほら、大丈夫でしょ」とあっけらかんとしている。でも、ほんとうは「大丈夫」ではなく、そのトンボは死んでしまうのです。その頃、「女性はすごいな」と思ひました。魚をさばくこともできるし、鳥を料理することも平気で出来るからです。僕は、「自然から命の大切さを学んだ」と思ひっていますが、同じ時代を生きた僕の回りにも、僕と違つた「感性」を持つ子どもたちもたくさんいました。ということは、「豊かな自然から命の大切さを学ぶ」というような、単純な「お話」ではないのかもしれない。

今でも憶えている、ある出来事がありました。近所のおじさんが、「飼っている犬が赤ちゃんを産んだ」と、近くの川にその子犬を投げ捨てていたのです。私の記憶に残っている、最初の「止める事のできない怒り」を感じたのは、その時だと思ひています。「この子犬は殺されてしまう。僕には、この子犬を助けることができない。このおじさんには、子犬の気持ちが全くわからないのだろう。このおじさんを、もっと大きな川に連れて行って、後ろから突き落としたり、このおじさんにも犬の気持ちがわかるのではないか」と思ひました。でも、大人になってから、このような「報復」手段では、問題は何も解決し

ないことも、よくわかりました。

学校でも同じような経験をしたことがありました。子どもたちの中であって、僕の場合は、「あなたはかなり変わっている」と、まわりからいつも言われていました。だからまず、学校があまり楽しくなかったし、学校に行っても「明日が運動会だ」というと、下痢をしたりして、かけっこよりも校庭のアリをじっと見ている方が楽しいという変わった子どもだったようです。そのような変わった子どもが皆さんの前で話をしても、あまり一般的な話にはならないのではないかと思います…。但し、最初に金子みずゐさんの話をしたように、感受性の高い子どもも、大人もいることは確かなのです。

先程、白川先生のお話の中にあつたように、お魚を食べてしまうと、「お魚さんが私の骨になるの、では、私もお魚になってしまうの」と尋ねるようなものの見方をする子どもがいる。それから、沖縄では、今でも、すべてのものに霊があると「信じて」生きている人々がたくさんいます。たとえば、変な話ですが、このマイクにも、椅子にも、水にも、ここにあるすべてのものに霊がある。そのような父親の影響も受けて、僕は育ってきました。あまりいい答えではありませんが、白川先生のお話の中から、私なりに一生懸命整理できたことは、「いくつかのものの見方とか考え方、特に子どもの中で発達に伴って、死ぬということをどのように理解できるようになるか」をお話していただいたのではないかと、それを私自身の経験と合わせて考えると、今のようないい答えになりますが、これは、城田安幸という極めて特殊な子どもが大人になった、今現在の感じ方ではないかと思っています。

一色：ありがとうございます。それに関連して城田先生に、私の方から教えていただきたいことがあります。城田先生は死を認識するというお話をされましたが、自分で死を認識することではなくて、ティーンエイジャーや小学生の中には、リセットできるからいいではないかというのに象徴されるように、自分ではない他者を傷つけるようなことが起こっています。また別の視点からみますと、人間は食べ物を食べなければ生きられない存在で、そういう生き物の命をもらっているわけです。食べる時に「いただきます」と言う。これは、命をいただきますということでもあると考える人もいます。その意味で、人間は、命あるものを栄養として食べなければいけない存在であるわけです。人間が生きていくために命をもらって食べることで、友人など同じ人間を傷つけたり、殺すことは別の次元だと思うのです。そのあたりを子どもたちにどのように教えていったらよいでしょうか。

城田：これは、とても難しい話で、答えはなかなか簡単には出て来ないと思います。少しだけ分かりやすい例を挙げると、農学生命科学部の学生には、農場実習という科目があります。これは皆さんに保育実習があるように農場に行って野良仕事をします。その時にリンゴ園でネズミが出てきます。ネズミはリンゴに害を与えるので、先生が、「殺せ」と言われたそうです。そうすると、ある学生が、カマを振りかざし、ネズミを追いかけて回し、「殺せ！殺せ！」と叫んでいたそうなのです。それを見ていた周りの学生が、やはり彼は「ちょっと違う」と思ったらしいのです。その学生に直接、尋ねますと、「先生

が殺せと言ったから、ネズミを必死になって追いかけてそして殺した」というのです。先生は「よくやった」と言われたそうです。

害虫だと言われている虫を私たちが農薬で殺す時もそうですね。自分が正しいと思ったら、他の生命を奪う時にあまり罪悪感を感じず、「殺せ、殺せ」という気持ちになるようです。今、この会場にネズミが出てきて、一色先生が、「殺せ」と言われたら皆さんはどうされますか？殺しますか？ネズミの場合は、少し「気持ち悪い」と感じられますか。ところが、相手がゴキブリの場合はどうなるのでしょうか？すぐに、殺虫剤を散布して、殺しませんか？私は妻とは高校の同級生で、出会ってから約40年、一緒に暮らしています。それでも、この前やっとカミングアウトしたことがありました。それは、私はゴキブリが大好きだということです（図7）。困ったことに、妻はゴキブリが大嫌いなのです。



図7 目玉模様が飛び出したゴキブリと城田

となり合った家を2軒、同じ敷地内に持っていますが、僕が書斎として使っている方の家に、この頃よくゴキブリが出没します。僕はゴキブリに、「よしこ」さんとか「太郎」さんなどの名前をつけています。ヤマトゴキブリは家の中と外を行き来して暮らしています。妻は、「最近、ゴキブリが多いので何とか駆除してよ」と言うのですが、これは、私にとって仲間を殺すことになりますから、「わかったよ」と、ゴキブリホイホイなどを置いています。妻がいなくなると、それらを隠してしまいます。約3億年も生き続けて来たゴキブリたちのすばらしさを、できるだけ多くの人に知ってもらおうと、僕なりの努力もしているのですが、なかなか、「偏見」を解くわけにはいきません。

基調講演でも述べましたが、僕たちは道路を、ずっと舗装し続けてきたのです。あの舗装道路の下には、トビムシという小さな昆虫たちや、葉っぱの中に住んでいるササラダニたちがたくさん住んでいるのです。これらのトビムシやダニが植物を分解してくれて、植物が栄養分を供給し、私たちは、植物の出す酸素を吸うことができるのです。たとえば、今この会場に大男がきて、この上にコンクリートやアスファルトを敷き詰め、下にいる私たち全部を押しつぶしてしまったとしましょう。私たちは、生きては行けないのです。そういうことを平気で大人たちがやった。この文明、文化というのは、僕の求めているものとは、かなり違うのではないかと、子どものころから思ってきたわけです。

これは極めて変わった子どもが感じ、そこから学んだことなので、「皆さん！ゴキブリに名前をつけて、ゴキブリと話し合えよう」とは言いませんが、ちょっとだけ、そのような変な人間もいることを考

えていただければ、生き物や命を大切にすることが、理解できるのではないかと思います。一色先生の質問への答えになりましたかどうかは、甚だ心もとないところですが…。

一色：白川先生、一言、豚のPちゃんとかアイザックスの事例を幼い子どもたちのところでお話されましたが、将来保育士や幼稚園教員になる学生たちが、小さい子どもたちと向かい合い命の問題を考えなければならぬわけです。その場合、例えば、今文部科学省でいうと、虫を育てるとか植物を育てるということですが、何をどう、どういうことを子どもたちに伝えていけばいいのでしょうか。

白川：命に関わることが大事であると思います。幼稚園教育要領にも「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」とあります。苦勞して餌を集めたり、飼育かごを掃除したり、糞を片付けたりすることがあって命の大切さがわかるのでしょう。ただ、幼児の場合、生命認識が確立していませんから、知的好奇心を抑えない方がよいと思います。

城田：私は子どももいいけれども、「甲南女子大生が命の大切さを学ぶ時」という形で議論をすれば、シンポジウムの内容が深まるのではないかと思います。実は、あまりお話ししたくないことなのですが、私は19歳の時に手首を切りました。ある時、「生きているか死んでいるかを、どのようにすれば証明できるか」と大学の先生から宿題を出されました。友人と話し合った僕たちの結論は、「証明するには自殺するしかない」というものでした。その理由は、「生きているか死んでいるかわからないで生きていても、生きている意味がない」。「もし、死んでいる場合は、自殺してもすでに死んでいるから、自殺を恐れる必要はない」。このような、矛盾する論理を繰り返しながら、友人は自らの命を絶ったのです。

残された僕は、その友人の死に対する十字架も、背負って生きていかなければならないのです。私は手首を切りましたが、でもまっすぐ切ってしまって、血がたくさん出てくるのですが、死なないので。だからこそ、19歳20歳の皆さんがどういうふうに死を学ぶかということも大切だという気がします。自分が大学の先生になった時に、「学生にだけは、絶対自殺をさせないようにしよう」と、決意しました。

一色：幼児向けの番組で「セサミ・ストリート」という有名な番組があります。そこで実は、セサミに出演していた人が本当に死んでしまったのです。すると次回からその人が出てこない。子どもたちにとって、その人が出てくるのを楽しみに待っている。その中で、死んでしまったことをどう伝えるかを学者、演出、プロデューサー皆で議論をしました。その結果は、子どもたちにも伝わるような言い方で、それを伝えましょうということでした。先程、養老先生のお話がありましたけれども、それと通じる部分があります。「その人は、もう決して帰ってこない」という言い方で子どもたちに伝えました。

【休憩】

一色：では、再開いたします。城田先生、白川先生、そして私の発言がそれぞれどうかみ合っているのかについては、いろいろな方面からいろいろとお考えになったのではないかと思います。会場にご参加されている皆さんのコメント、質問を通して、「子どもが命の尊さを学ぶとき」について考えていきたいと思います。どなたかいらっしゃいますか。

一般 A：大阪で長年障害児教育に携わってきました。養護学校が義務制になって、非常に障害の重い児童がどんどん擁護学校に来るようになりました。それを担任している若い先生が、担当している子どもが亡くなったというので、よく泣いて私のところに来ていました。一人の子どもが亡くなることは、とても悲しいことで、泣いてしまうのは仕方がないけれども、教員としてこれからずっと続けるとしたら、泣いているだけでいいのか、亡くなった親の方がもっと悲しんでいるのだから、親のことも考えて、親を慰めるような言葉をかけることを考えてはどうかと言ったのです。すると、私が冷たい人間だという空気が流れてきて、大学を卒業したての若い女性の先生は、そういう形で子どもが亡くなるとただ悲しいということで泣いてしまうことが多いのですが、それに対して、多少年配の私などはそのような言い方をするとどうもきつくあたるようなのですが、先生はどのようにお考えでしょうか。

城田：きちんとしたお答になるかどうかわかりませんが、基調講演でもお話しましたように、私の父親は沖縄出身で、このように私に教えました。自然科学的ではないのですが、「死んだ人は、しばらく別の世界に行ってしまう。その時には、悲しんであげないといけない。悲しんであげないと別の世界に行けない。でもいつまでも悲しんでいると、あちらの世界からこちらに戻ってこれない」と言うのです。しばらくすると、その人の「霊」は戻ってくるのです。沖縄は、元々は遺体を風葬していました。私の家族のお墓も大きいのですが、亀の甲羅のような、女性のお腹のような形をしていて、そこに亡くなられた方をそのまま寝かしておくのです。そうすると段々とミイラになって朽ちていって、ハエも卵を産んでウジがやってきて最後には骨になります。その骨をきちんと泡盛で洗って、昔の縄文時代の甕棺のような壺の中に入れて、そして亡くなった方は、しばらく別の世界に行って、また戻ってくる（図8）。



図8 沖縄の城田家の墓の前で 城田安幸（左端）と
ジョン・ヒロシ・シロタ（右端）

自分の子どもや生徒たちが自分より先に死ぬということはもっとも悲しいことですが、そのような場合でも「死者たちの霊は、常に自分たちと一緒にいるのだ」と考えるのです。これは、恐らく、自然科

学的には正しくないことだと思います。自然科学的には「霊」というものは、存在しないと思われます。但し、「亡くなった方がいつも自分と一緒にいてくれる」と思うことで、私たちの気持ちは極めて楽になります。これは、いろいろな医療の分野でも、例えば、末期ガンの方にどのように対応するかという問題など、いろいろな報告例があります。たとえば、ターミナルケアで、「もうだめだ、ガンで死ぬのは嫌だ、嫌だ…」と、嘆きながら生きる人と、「人間はいつか別の世界に行く。だけれども、その後また別の世界で楽しく生きていけるし、おじいちゃん、おばあちゃんもいるかも知れない。生きていれるだけでも幸せ。最後の時間を楽しもう…」と、いわゆる、宗教に通じる形での治療の仕方もあります。もっと極端な言い方をしますと、「催眠療法」という治療方法もあります。そう考えてみると、人間を幸せにするためにだったら、だれも傷つけない小さな嘘だったら、積極的についてもいいのではないかな。実は、今日お話ししたかったことはそういうことなのです。

『マジック・アップル』は、本当は、一晩でりんごが実るわけではないのです。でも、実ったのだと解釈するのです。だから、担当している子どもが亡くなったことはとても悲しいことだけれども、「きっと、その子どもが亡くなることで、生き残った僕たちに、生きることの大切さ、素晴らしさを、その子が教えてくれたのだよ」。僕の父親が生きていたら、そのように話してくれると思います。

僕は、自分の子どもたちに、僕が死んだ時には、「おやじはやっと死ぬことができた。よかった、よかった。今まで背負ってきたたくさんの十字架を、ここで自分の肩から下ろすことができ、おやじはやっと幸せになれる」と考えなさいと言っています。私の父親が私に言ったのは、先程のように、しばらくは悲しんでもいいけれども、いつまでも悲しんでいると、こちらに戻って来れない。戻ってきたら、今度は、いつまでも、お前たちと一緒にいられるんだよと話すことです。例えば、生徒さんが亡くなった。その亡くなった時に直接自分が関係しないような形で亡くなられたとしても、その生徒さんの死を今後の自分の教育の中でどうやって生かしていくか、正しく自分の生き方そのものを、その子どもの死から、どのように学んでいくのかということでしょう。もっと大雑把な言い方をしますと、身近な人の死を通じて、自分の心の広さや豊かさ、いわゆる許容力や寛大さなど、それらをどういうふう、確かめながら受け入れていくかということだと思います。

子どもの時や、若い時は、養老さんも『死の壁』の中で述べられていたように、中々、死を受け入れることはできません。それは仕方がないことだと思います。変な話ですが、実は私は57歳で死ぬ「予定」だったのです。これは、母親にそのように「刷り込まれた」のです。僕がまだ赤ちゃんの頃、ある易者さんが僕の母親に、「あなたの息子は57歳で世界を手に入れます。しかし世界を手に入れたその歳に、別の世界に行きます」と言われたそうです。ですから私は、母親から「お前は57歳で死ぬ」と、ずっと言われながら育てられてきたのです。自然科学的には、全く根拠のないことですが、心のどこかで信じていたのかもしれません。自然科学者がこのようなことを言うてはいけけないので、だれにも話しはしていませんでした。ところが、57歳の時に、未熟リンゴを材料にした免疫賦活剤の特許が取れてし

まったのです。これが、「予言」された、「57歳で世界を手にいれます」ということだったら、どうなるのだろうかと妻に相談しました。

あと30分で58歳になるという時に、突然、妻が「家から出ないで!」と言いました。「そこでじっとしていて」と言われました。30分経って、58歳になった時に、世の中が光り輝いて見えたのです。学生たちも、僕の母親の「予言」を「信じていた」ようでした。その次の日の授業の時に、「先生!生きていたじゃない」と言われました。その話を別の先生にお話したら、「あなたのお母さんは偉い、あなたはファザコンだと思っていたけれど、本当はマザコンだったのだ」と言われました。「母親にされてやられたか!」。そういうふうを感じたことも事実です。白川先生も4歳で死ぬかも知れないと言われて、それが自分の中であって、奮起されて、このような立派な本を書かれたり、いいお仕事をされたのかもしれません。

白川：私も、これだけ長く生きてくると、いろいろな別れを経験していますので、たぶん同じだと思うのですが、やはり亡くなった人の魂はここにいると思っています。とても親しい人が突然亡くなった時に、コンピュータにその人のすべてのデータを入れて、コンピュータで死者との交流ができればいいと考えたぐらいです。人がよく仏壇の前で話する光景を見ます。例えば、お父さんが亡くなっていてお母さんが仏壇に向かって「今度娘がようやく御嫁にいきます、相手はこんな人ですよ。どう思いますか?」などと話しかけているのと同じです。やはり心の問題であり、科学的にすべて説明できるのではないと思います。先ほどのスーザン・アイザックスも精神分析学者で、先の事例が載っている「子どもの知的発達」という本で科学的なことを書いているのですが、実は、子どもの心には科学的な好奇心と非科学的にみえるファンタジーが同時に混在していると考えています。

一色：お二人のジャンルの違う科学的、論理的な先生方から今のような発言が出てくることが、人間は面白いということの証しではないでしょうか。やはりそういう面と科学的な面と両面持ち合わせているのではないかと思います。

城田：もうひとつ、先ほどのお話で大切な点は、「教員としてプロ意識を持ち続ける」ようにしてあげることだと思います。これはとても大事なことです。私も、もう32年間教員をしていると、ここはプロ意識でがんばらなければいけないということがわかってきます。でも若い先生方には中々、そのようにできない場合もあります。これは、昔から言うように、年を重ねるしかないのです。若い先生がそうやって今、子どもが死んだと落ち込んで泣いていらっしゃる時には、もうしばらく時間が必要だと周りの先生方が、温かく見守ってあげればいかがでしょうか…。いつまでも泣いているのはだめだけれども、いつか教育者としてのプロ意識を持ていただくようになるにはどうすればいいのかということを一緒に考えてあげれば、その方が60歳ぐらいになった時には立派な先生になられているかも知れませんね。私の周りにもそのような先生がいらっしゃいましたから…。昔からよく言われるのは、「青年の心

が全くわからない青年心理学の先生」とか、「児童の心がわからない児童心理学の先生」など、若い時には「いろいろ矛盾する」先生方もいらっしゃるという話です。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般B：今日はタイトルがとても気になったので、お話を伺いにきたのですが、私には、小学校1年生の6歳の子どもがおりますが、入学前の集団登校の時に6年生のお姉さんから、一緒に集団で行くから、何時にここで待っているから来てねというお手紙を初めてもらいました。同じ班の皆で書いたものだと思うのですが、ただの落書きなのですが、その中の一つが人をナイフで刺して血が出ている絵があったのです。私はとてもショックで、今から1年生になって一緒に学校に行くのに、このようなことを描いている子どもがいるのだと思うととても怖くて、その地区にいるお母さんに相談すると気にし過ぎていると言われたのです。マンションの宅配ボックスの中にもいたずらで「死ね」とか「バカ」と小学生が書いてポストに入れていたずらをしています。この前、子どもの友達が捕まえたカエルを家の子どもが預かって持って帰ってきたのです。カエルが何を食べるのかと思って、調べたら、生きている動物、虫しか食べないと書いてあったので、このままでは死んでしまうと思い、逃がしておいでと言ったのですが、次の日にまた持って帰ってきて、「なぜ持って帰ってきたの」と聞くと、「逃がしてはだめ」と友達に言われたからというのです。結局、その日の夕方に子どもと一緒に逃がしたのですが、友達には、カエルは生きたものしか食べないのだから、捕まえたままでは死んでしまうから、かわいいのはわかるけど、カエルのためにならないから、逃がしたと説明しなさいと言って、その次の日にどうだったと聞くと「最悪」「最低」といじめられて、そのまま我慢したというのです。自分の子どもに対して、命の関わり方をどう見ているのかというのがとても気になるのですが、私も仕事もしているので、親御さんたちともそのような話もできないのですが、自分が自分の子どもに言えるのに、周りの子どもには言えない。そのようなことを目の当たりにした時に、これからどうしていけばいいのかと思うのですが、何かアドバイスをいただきたいのです。

城田：今のお話の中には、2つの問題があります。まず、ナイフで刺し殺す絵ですね。私が卒業研究を指導した学生の中にも、「合法的に人を殺したい」と言った学生がいました。実は、彼は大学院の時に、ネット上の掲示板に私のことを「死ね、殺す」とよく書きこんだのです。とにかく私だとすぐわかるように、「弘前大学S田 死ね」と書くのです。彼は、私がある掲示板を見ていることを熟知した上で、匿名性を良いことに書き込みを続けたのです。僕が見ていることがわかっている、その僕の反応を楽しみながら書き込みを続けていたのです。普通の人にこのようなお話をしますと、びっくりされます。でもそういう学生は、結構いるのです。面と向かってその先生には言えないから、匿名性を利用してネット上で書き込みを行なう。ネット社会の中で、匿名性を良い事に「人を傷つけた」「殺せ、死ね」と言うような人が確実に増えていると思われます。

「長崎の少女殺人」のように、ネット社会の広がり犯罪に繋がっていくという考えもあります。神戸の「酒鬼薔薇聖斗」の事件の時も、犯人の世代がバーチャル世代で、所謂、無差別殺人をする人々がその世代と重なっているという考えもあります。しかし、僕には、どうもマスコミがそういう取り上げ方をしているのではないかと思えてならないのです。100年ぐらいの時間間隔で見ますと、無差別殺人に近いような殺人事件は、結構あります。たまたま表面化してきたのが、今のネット社会と絡んでいるから、そのように思われるのかもしれませんが。20世紀に1億人もの人が戦争で殺された事からも、「ヒトは本質的に残酷」なのだと思います。お話したように、僕が子どもの頃に、「残虐」とトンボを殺していた女の子もいました。でも、彼女に「罪の意識」は、まったくなかったと思います。では、彼女が大人になった今も、トンボを平気で殺しているのだろうか？きつと、そうではないのではないかと思います。子どもがトンボを殺していると、それを止めるお母さんやおばあさんになっているのではないかと思います。子どもから大人になる時に、彼女も「小さな命の尊さ」を、きつと学んでいると思います。

実は、子どものころ、僕は「メザシ」が食べられなかったのです。目に串が刺っているのを見て食べられないのです。それに鶏肉もあまり得意ではありませんでした。これは、今も続いています。ニワトリ34羽と一緒に暮らしていたから、ニワトリは私にとっては家族なのです。その、家族を「食べる」ことは、できなかったのです。でも、最近はメザシは食べれますし、鶏肉も進んでではありませんが、食べる事はできます。僕も、人間の命を大切にしなければいけないことは百も承知です。でも、小さな命を守りながらも、人間の命も守り続ける事が矛盾せず可能になるのではないかと、今、一生懸命考えているわけです。

この事に関連して、私の研究室では、もう10年前から卒業生が置いて行ったヒョウモントカゲモドキを、今でも飼育しています。昔、一色先生がNHKのプロデューサーだった時に、一緒につくりました、ハイビジョンスペシャル「ふしぎな ふしぎな 森の物語」という番組の冒頭に出てくるトカゲモドキです。その時に学生が飼っていたのをたまたま使って、そのまま飼い続けて、もう10年以上になります。夏の間は、イナゴやバッタを野外から捕ってきてあげています。当然、イナゴやバッタの命はなくなります。でもそれをあげないとヒョウモントカゲモドキは死んでしまいます。冬は、ヨーロッパイエコオロギを飼って、自分たちでそれを増やして餌としてあげています。

学生たちは、餌をあげる中で、動物は、やはり他のものの命によって支えられているのだ、それは避けることができないものだということを学ぶのでしょうか。それが果たして悪いことなのかどうかは、それで、「自分はベジタリアンとして生きていく」という方もいていいし…。お子さんが将来どのように生きていくかは、自分で選ぶ問題だと思います。私の父親は、私が12歳の時に、山羊を殺し食べることで、「お前は山羊と一緒に生きていく」というものの見方を伝えようとしました。このことから、僕には逆の効果しか生まれませんでした。だから私は、沖縄的なものの見方や考え方は大嫌いでした

し、ずっと父親を憎みながら成長しました。その父親を、私が「手術を選んで」、別の世界に旅立たせてしまったのです。「科学者」として、医師に一番近かった私が、医師から説得されて手術を行なわせた結果、父はその命を短く終えてしまったのです。

科学者である医師が間違いを犯し、さらに、すべて正直に言わなければいけない医師が、手術の際に血圧が下がったことを隠匿したのです。大阪大学の医学部で解剖をしてもらい、その時、父親の臓器を見せられました。内臓をとりだされた父親が、横に寝ているわけです。父親のお腹の中まで見たという子どもは、あまりいないと思うのですが、その次の日の朝に、父親が夢に出てきました。所謂、枕立ちをしました。「腹の中まで見ろとは言わなかったぞ。この馬鹿が」と言われました。その時に父親が、「手術と抗がん剤と放射線以外のガンの治療法を考えろ、それがお前に残された使命である」というのです。

だから、今のお子さんに対して、お母さんがどのようにしてあげればいいのかというのは、このようにしてあげればいいのかという処方箋はなくて、そのお母さんと一緒に育っていく中で、悪いことをする人もいるし、優しい人もいるし、命を大切に作る人もいるし、いない人もいるし、そんな中で、子どもさんはどんなお兄ちゃんになりたいのだろうとそれを一緒に考えていくしかないのではないかと思います。

先程の「合法的に人を殺したい」と言った学生の話ですが、ひどい学生だと思わないでください。おサルさんと同じような生活をしていた頃には、私みたいな「意気地のないサル」よりは、彼みたいなサルの方がたくさん餌を取って来れたと思います。罪の意識を感じて、自分が今日、何を餌にすればいいのか迷っているサルは、多くの餌を取れなかったと思われます。「殺せ、殺せ」と、沢山の餌を取ってきてそれをメスザルにあげる雄ザルの方が、赤ちゃんも作れたし、遺伝子は集団中に残せたかもしれません。そうすると、どうしても私たちの中には、そのように「殺せ、殺せ」という遺伝子も、残っているのだと思います。そこを忘れてはいけないということです。人間はどうも、2つに分けるのが好きで、性善説とか性悪説とか善と悪の2つに分けたがります。しかし、これらは連続してずっとつながっているものだと思います。私たちの中にも、「殺すのが平気」な人もいるし、「殺したがっている人」もいるかもしれません。でも大多数の人々は、そうは思っていないで、「命を大切にしたい」と思っている。それらが一緒にいる中で、どのようにしていったら、平穏で安全な皆の幸せな世の中ができるのかというようなことだと思います。

一色：では、2番目のカエルを飼っていてというお話についてどうお考えですか。

白川：カエルを飼えるような世の中の方がいいと思います。昔はそうだったと思いますが、カエルは本当に生食だから、それを育てられるような家庭生活の方が望ましいと思いますが、今はそれが許されない条件がとてたくさんあります。近隣の環境がどうであるかということもありますし、お母さんとし

ての対応の仕方はそれしかなかったと思います。同じ子育てしているお母さん同士がどの程度共同で協力しあって子育てができるか、今の現代社会では、なかなか難しくなっていて、それも大きな問題です。ナイフで刺している絵を描いた子どもさんがどういう親子で、どういう子どもさんかということも簡単には判断ができないと思いますし、問題は同じ学校であることですし、そのこの辺りを話し合えるような環境、共に子育てをすることができればいいと思います。

城田：カエルは実は、ニワトリのササミを凍結しておいて、それを解凍して与えると食べます。カエルにもよりますが、人慣れしてくると大丈夫です。私もずっとカエルを飼っていましたし、他にも、生きた小動物や昆虫を餌とする動物もいろいろ飼っていました。でも、カエルにニワトリのササミを与える場合もニワトリを殺しているわけですから、お母さんやお子さんがどう思われるかですが…、飼うことはできます。

一色：では、他にご意見、ご質問はございますか。

一般C：4歳と3歳の女の子がいるのですが、今ちょうどいろいろなことに興味があって、動物をちぎったりとか花をちぎったりしていて、私の方も食べることがどういうことかということで、生きている海老を買ってきて、触らせた後で、茹でて、死ぬということを目の前で見せたこともあるのですが、どの段階で、いけないということを認識するのかというのを小学校の子どもでもわかっているのか、わからずやっているのかという先程のお話もありますが、どこまで親として教えるべきなのか、どういうことをしたらわかってもらえるのかという具体的なことが手探りなのです。公園でアリを殺してみることもできないし、かといって殺した後にはいけないよと言うのもおかしいし、殺す前に止めるのも子どもの中でバーチャルな世界になってしまいます。その線引きがとても難しいので、親としての線引きを知りたくて本日伺いました。

白川：子ども自身が、やはり生きていたのを殺したら可愛そうと思うことが、その時であると思います。例えば、幼稚園の年長さんたちが、砂場でみんなで遊んでいる。そこに大きなアリがきます。すると、子どもの中から、アリを砂に埋めてしまおうとか水溜りで溺れさせようとか言い出します。これはよくある光景で、ある研究会で実際にそのようなことがありました。他の園の先生たちも見えていて、止めようかどうかと言うと言いながら見ていました。子どもたちはわいわいとやっています。すると別の子どもがきて、「可哀そうだから止めよう」となって、それを見ていた先生たちはほっとしたのです。大学生にいつ頃までやっていたかと聞くと、アリの巣に水を入れたり、熱いお湯を入れたりというのは、女の子でもたくさんやっていました。やはり、その子ども自身にわかる時期があるのではないかと思います。今、「生きているから可哀そうだよ」ということは、お母さんの本当の気持ちとして言えればいいと思います。

一般C：お友達同士の傷つけ合いなども、そういうことに関係してくるのかと思ったのです。下の子ど

もが、お友達によく噛みつくのです。噛みつくことと、相手を大事にするということと、命ということとを関係して教えるにはどうしたらいいのかと思います。友達や兄弟によく噛みつくのです。

白川：それもよく聞かれます。先ほどのアリの話になりますと、わざとアリをたくさん集めて、石の上で潰している子どもの事例もありました。それは病的な感じでやっていたので、問題があるかと思いました。噛みつくということは、言葉で言えないから噛みつく、口で負ける、腕力で負けるから噛みつくことがあると思います。後が残るぐらい噛むのは問題ですね。

城田：私の娘は8ヵ月目から保育所に行きまして、その頃、私は24歳だったのですが、ある時期に娘が保育所から噛み跡をつけて帰ってきたのです。新しく入ってきたS君が噛むらしいのです。S君は自分の言いたいことを相手に伝えたい時に伝わらない時、例えば、そのおもちゃが欲しい時に、貸してもらえないとなると相手の手を持って噛んでしまう。やられると、こんど相手の女の子がS君のことを噛んだのです。それがその日の内に皆の中に広まってしまったのです。それで、娘も噛むようになったのですが、私は全然気にしませんでした。一番最初に噛んだ人は、なぜ噛んだのかということを理解してあげて、その状況を避けるようにしてあげればいいのです。人間はサルではないので、「それが欲しいから貸して」ということを相手に伝えるのに、噛んで伝えるのではなくて、「貸して」と言葉で言うようにする。1歳前後でも、それはやっていけるのです。今のお話を聞いていて、僕の娘たちが噛み合った時は1、2歳の頃なので、Cさんのお子さんとは、「違う噛み合い」かもしれないと思ったのですが…。

白川：保育園を対象に全国的に調査した結果を見たことがあるのですが、乳児保育を行っている保育園のほとんどで1、2歳児に必ず噛む子どもがいました。

城田：それよりも虫を殺すということの方が大事だと思います。私が先程、「赤とんぼをちぎって並べて…」というお話をしましたが、その子が今も、同じようにやっているかどうかというと、決してそうではないと思います。「他の生命を食料のために殺す事が残酷か」ということに対し、とても割り切っている社会があります。キリスト教国では、家畜は食べていいのです。自分たちが一生懸命育てた家畜は、「殺して食べて」もいいのです。彼らが問題にするのは、たとえば、日本などが行なう捕鯨です。「鯨を捕まえて殺して食べる日本は、文明国ではない」とキリスト教国の人は言うのです。彼らは、「家畜と同じように鯨も飼育して飼えば、食料にしてもいい」と主張します。「鯨は知能がいい」と言いますが、ウシもブタもとても知能が発達しています。私は学生時代、北海道で約40日間、牛飼いをしたことがあります。ウシたちはきちんと僕のことを覚えてくれるし、人を識別できるし、愛情表現も豊かです。明治以前は日本人は牛肉を食べなかったのですが、キリスト教国の文化が入ってきて、家畜は食べてもいいということになってきました。やはり、ある文化、文明の元で、これはやってもいい、これはやってはいけないと、皆で決めた申し合わせみたいなものがあるのです。それを私たちはどこまで受け入れて、子どもたちに伝えるかどうか。例えば私の父親の場合には、ヤギを殺して食べる一方、「お盆の

頃に家に入ってくる虫、お墓の周りにいる虫は、全部おじいさん、おばあさんだから、絶対殺してはいけない」と言うのです。ある日本の映画監督が作った沖縄を舞台にした映画があったのですが、冒頭シーンで、お墓のところにいるクモを「ウチナンチュウ」の主人公が蹴散らしているのです。これはやはり日本の方が作られた沖縄の映画で、沖縄の人が作った映画ではないと感じました。父のこの教えが私の中ではいまだに生きていて、「虫を殺してはいけない」という自分がいます。そんなことを言っていたら、「害虫駆除はどうするのか!」。それをずっと引きずったまま「昆虫学者」になり、リンゴ園では農薬を散布せずにリンゴを育てる方法を、今も模索しているのです。

一色：城田先生、前に伺った話で、虫を殺してみてもわかる命の大切さ。子どもは虫が好きだけれども残酷だというその辺りのお話をしていただけますか。

城田：子どもだけではなくて、人間というのは「基本的に残酷」だと思います。他の命をいただいて生きているわけですから。その「残酷だ」というところから始まっていけないことには、恐らく罪の意識も生まれてこないのでしょう。それに気づかずにやってしまうのが子どもであって、それはやはり許してあげるべきなのです。その経験の中から、成長するにしたがって、大人になるにしたがって「小さな命の尊さ」を学ぶ…。そのためには、子どもが行なう残酷な行為を許容する。残酷な行為を繰り返し経験する中で、子どもが「自分たちが残酷なままではいけない」と…。特に、小さな他の生命だけでなく、「人間という同じ仲間を殺すことの意味」。その人が自分と同じように生きてきて、その人が殺されてしまった。では、「その人の家族は一体どんなに悲しんで、苦しんでいるのか」というところまで、思い描けるような子ども＝大人を育てるためには、一体どのようにすれば良いのか、それが分かれば現在起きている「無差別殺人を防ぐ」問題解決に一步近づくでしょう。今、一番欠けているのは、このような観点、「子どもが大人になるのを見守ること」ではないかと思います。

一色：ありがとうございました。今日は「子どもが命の尊さを学ぶとき」ということで、お二人の先生方からいろいろとお話をしていただきました。特に自然が段々となくなってきた、身の回りには人工物がいっぱいあって、その中に先程城田先生がおっしゃったネット社会もあります。そのようなものが増えていく中で、命の大切さ、尊さをどうやって次の世代にバトンタッチしていくかは、非常に大きなテーマであると思います。それに対して一つの答えがあることはないのは、お二人の先生のお話からもわかりました。では、どうしたらいいのか。それぞれが、やはり自分の家族、幼稚園、保育所で、それぞれのところでそれぞれが向き合って、一緒に考えていくことを地道に続けていくというところから出発するしかない、答えが必ず出てくればいいのですが、そうはならないのかなと感じました。一時前には、『なぜ人を殺してはいけないのか?』という本がベストセラーになったように、この問題は、一人ひとりが自分の問題として考えることが大切だと思いました。

では時間も超過しておりますので、これで終了いたします。